

## 245 名土古墳(矢戸1号墳)

— 山間部の中期古墳 —

### 所在地

日野郡日南町矢戸字名土

### 立地

矢戸川と日野川の合流点にある丘陵先端部。

### 時期

古墳時代中期後半。

### 発見と調査

明治40年頃に公園造成の工事中に箱式石棺が見つかり、中に刀剣2本、切子玉、管玉、ガラス玉、銅鏡、須恵器が副葬されていたという(文献2)。出土品のうち、鏡1面、切子玉1点、ガラス小玉28点、須恵器2点が東京帝室博物館に収蔵された。遺跡地図の登録名は矢戸1号墳であるが、名土古墳と呼び習わされている。

### 遺跡の種類

古墳(箱式石棺)。

### 遺構と遺物

箱式石棺は、長さ3尺(90cm)、幅1.5尺(45cm)の小規模なものというが、これ以上詳しい情報はない。

東京国立博物館に収蔵された遺物のうち、実見できた遺物は、鏡、玉の一部、須恵器である(図1)。

鏡は径8.9cmの珠文鏡で、文様構成は、幅狭い斜縁、内区外周に鋸歯文、複線波文、櫛歯文を施し、その内側に2重の珠文列を入れる。珠文は外側に21個、内側に17個あり、比較的整然と並ぶが、一部に3列になる部分がある。岩本崇が充填系A群とするもので、中期中葉以降に出現するという(文献1)。鈕孔は幅6mm、高さ2.5mmの方形を呈する。

切子玉とされたのは、碧玉製の棗玉である。濃緑色の堅緻な素材で、出雲産と考えられる。中央の稜線は甘く、明瞭な面取りもないことから、切子玉とは呼べない。最大径1.4cm、高さ1.6cmで、片面穿孔である。

須恵器は、有蓋高坏1点、脚付短頸壺1点がある。高坏は、口縁部径10.0cm、高さ8.45cmを測る。口縁部の立ち上がりは高く、端部は丸く収めて全体的に薄く仕上げる。外面の約1/2を反時計回りにヘラケズリを施す。脚には方形スカシを3方向にあけている。

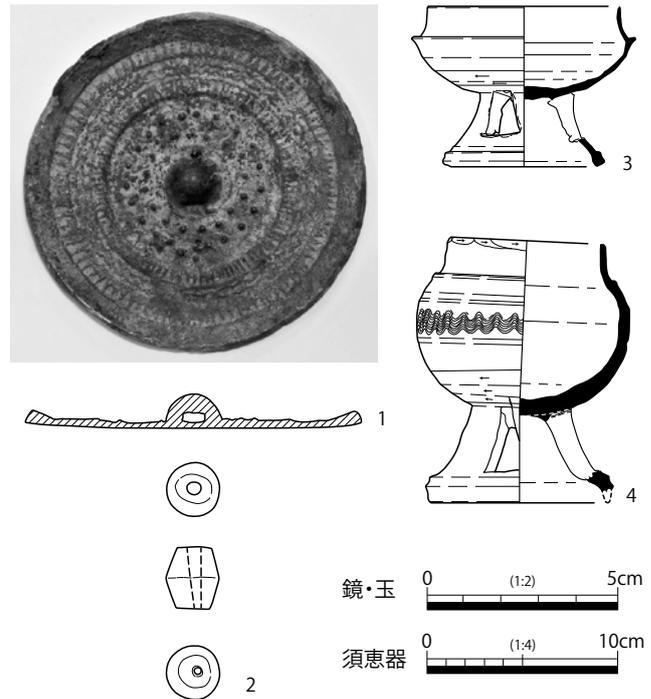


図1 名土古墳出土遺物実測図

脚付短頸壺は、口縁部径8.0cm、高さ14.0cmを測る。口縁部は蓋受けとなる段を作り出して、高く立ち上がる。口縁部から外面は面取りして鋭く仕上げる。蓋をつけたまま焼成したと考えられ、口縁部のみ自然釉が付着しない。壺胴部中央には、上下を沈線で区画した間に櫛描き波状文を施し、底部は反時計回りの回転ヘラケズリを施す。また、内面には赤色顔料が付着する。脚部は方形スカシを4方向にあける。脚端部の稜線はやや甘い。

出土した須恵器は、陶邑編年のTK23～TK47型式段階に位置付けられ、鏡や棗玉の年代とも調和的である。

### 特徴と意義

遺物の数と種類は少ないが、中期後半の鏡と玉、須恵器の組み合わせが知られる事例として貴重である。

### 現状と遺物

古墳は現存しないが、遺物は東京国立博物館に収蔵されて適切に保管されている。

### 文献

1. 岩本崇 2014 「銅鏡副葬と山陰の後・終末期古墳—文堂古墳出土鏡の年代的・地域的位置の検討—」『文堂古墳』大手前大学史学研究所・香美町教育委員会 pp. 135-161
2. 梅原末治 1924 『因伯二国に於ける古墳の調査』鳥取県史蹟勝地調査報告 第二冊 鳥取県

(高田 健一)